

工兵、中支に戦う

福島県 田中 忠 弘

私は大正十一（一九二二）年五月十四日生れの長男です。家は父、母、兄一人、妹三人の七人家族です。父が石材業をやっています、住み込みの職人さんが二人と、通いの職人さんが二人いました。学歴は地元の坂下尋常高等小学校の高等科を昭和十二年三月二十四日卒業して、父の後継ぎを目指して石工の手伝いをしていました。

徴兵検査は福島連隊区司令部から来た陸軍中佐から「理想的な兵隊だ」と賞賛され、甲種合格と宣せられました。昭和十七（一九四二）年七月でした。当時父は五十七歳、母は五十歳でした。

昭和十七年十二月一日、仙台の東部第二十九部隊（工兵第二連隊）へ入営。二週間後、第十三師団工兵第十三連隊要員として仙台を出発しました。引率要員として中支から将校一、下士官四人が派

遣されてきていました。仙台から軍用列車で下関へ着き、輸送船で玄界灘の荒波に揺られて釜山に上陸、鉄道で朝鮮半島を北上、内地と異なる風景に目を見張りながら満州国の奉天（瀋陽）に到着、初めて見る支那大陸の広大さに圧倒されながら山海関の万里の長城の巨大さに感嘆の声を上げるうちに大陸を南下し、南京に到着、ここで乗船、揚子江を上流へと遡航しました。揚子の兵站宿舍で正月を迎えました。

宜昌の手前の荊門クイキンに師団司令部が、連隊本部は朱河湾シカワにありました。連隊本部から衛生兵が出迎えに来てくれ、第一中隊は本部と同じ朱河湾に駐屯していました。兵舎は煉瓦造りで古年兵は福島県や宮城県、新潟県出身者で五年兵もおりました。第二中隊は漢水に駐屯しておりました。昭和十八年七月に四年兵と五年兵が除隊して日本に帰りましたが、それ以後は終戦まで除隊はありませんでした。

初年兵教育は初年兵だけが別に教育を受け、一

期終了後、各内務班に配属されました。食事は結構、良かったです。

教育中は大変でビンタもありましたが、内務班内では無く、イジメは全くありませんでした。近くの沙洲の街に映画館があり班長が連れていくから洗濯は止めてついてこいと誘ってくれました。六カ月前に入隊した先輩が、やさしく親切に指導してくれたので大変助かりました。

工兵の教育は爆薬の取り扱いから始まり、信管の切り方、架橋作業、舟艇の操法、戦車用の架橋の時は山から太い丸太を切り出し、川の上流から流した丸太を使って架けました。武装は歩兵と似ていますがエンピが歩兵より大きく、薬盒（弾入れ）は前後一つずつですが、そのかわり手榴弾を前に一個持たされ、さらに黄色火薬五キロを背のうの脇に吊らされました。十字鋏もありました。これに信管をつけると鉄道レールの爆破に使われました。小銃は三八式が各人一挺が渡され、一個分隊に軽機関銃が一挺ありました。

工兵になる兵隊は身体が大きく頑丈な青年が選ばれるようで、浴場でびっくりしたのは裸の背中一面に鯉の滝登りの入れ墨が見事に彫り込まれている初年兵を見た時でした。

揚子江で舟艇の演習があり櫓の練習をさせられました。各班競争で鉄帽をかぶっていは頭がブカブカして邪魔になるので、鉄帽を外して櫓をこいでいたら「田中、戦死！」と判定されました。工兵連隊は連隊として行動することではなく、必ず

歩兵部隊に中隊又は小隊単位で配属されて作戦に参加します。

敵前渡河作戦の時に、舟に歩兵を乗せて櫓を漕ぐ時はただ一人、立ち上がって漕ぐのですから危険千万の上ありませんが、これが工兵の任務ですから勇気を振ってやりました。架橋の時は三々四人で「タコ」を使って丸太を柱にするため打ち込むのですが、ちよつと、力を抜くと「タコ」の重みが自分の方に掛ってくるので力を抜くことができません、歯を喰いしばって頑張りました。

工兵隊には機材を運搬するための機材小隊が必ずついています。「タコ」は正規のものは鉄製で非常に重いものでしたので機材小隊が運搬していました。

私は作戦中、右脚の踵を敵弾の破片で飛ばされ野戦病院に入隊する予定のところ軍医さんが「田中、入院するな、入ったら殺されるぞ、赤チン塗って俺が治してやるから」と忠告してくれました。不思議に思っただけで尋ねると「入院しても食物が無い。手当もいい加減だ、殺されるぞ」と言われ「歩けなければ俺の馬に乗れ」と親切に言ってくれました。

工兵は見習士官以上の人は乗馬を持っていたので、他の将校さんも「俺の馬に乗れ」と言っていた。ただき本当に有り難かったですね。

作戦中、負傷して野戦病院に入った戦友を見舞ったらシラミだらけの毛布にくるまっていて飯も口々に食っていない様子を見て、軍医さんの言葉が本当だったと思いました。工兵の連隊の規模は

歩兵の大隊と同じぐらいで、連隊長は少佐か中佐でした。

私が入隊した時は佐野村武貞少佐で良い方でしたが途中で交代され、後任の石川県三中佐は九州別府出身で召集将校の実戦経験なしの方で、演習のつもりで無理な作戦を強要するので部下から「言うことをきいていたら、命がいくつあっても足りません」と敬遠されておりました。

昭和十八年十一月三日常德作戦中、折畳舟で歩兵第六十三連隊第二大隊を敵前渡河させた時は、ただ一人櫓を握って敵弾雨飛の中を立って第一陣を渡し切り、取って返して第二陣を渡し終った時は何んともいえぬ達成感に浸りました。

昭和十八年十一月三十日、漆家河の戦闘で、山の上の敵から雨あられのように射たれていた時、歩兵の援助が無いまま工兵の我々に前進を強要したので止むなく小隊長、班長、兵長、私の順に前進しました。

間もなく私の前にいた兵長が急にバタツと前に

倒れたので、私が「兵長殿！」と叫んで、兵長の前に走って抱き起こしたら、班長が「田中！何やってるんだ！」と叱られ、隠れるように言われましたので慌てて物陰にかくれました。お陰で敵弾に当らず助かりました。兵長は頭に貫通銃創で即死でした。衡陽作戦は非常な激戦で、当時珍しい火焰放射器を使って、敵のトーチカを攻める寸前に、敵が白旗を振ったので使わずに終わりました。

私が初年兵として一緒に入隊した者は百三十人でしたが、無事復員したのは僅か四十人でした。

私の軍歴の概要は左記の通りです。

昭和十七年十二月一日 仙台東部第二十九部隊

(第十三師団工兵第二連隊補充隊) に入営

昭和十八年一月十三日 中支派遣軍第十三師団

工兵第十三連隊第一中隊(阿湾)へ転属

昭和十八年六月まで初年兵教育 七月工兵第十

三連隊第一中隊第三小隊配属、十月常德作戦

に出発

十一月三日未明 松滋河を折疊舟にて敵前渡

河、歩兵第六十五連隊第二大隊が敵前渡河

昭和十八年十一月二十日 漆家河の敵前渡河

十二月二十六日沙市に帰營

昭和十九年四月十九日まで沙市警備

四月二十日 湘桂作戦参加のため沙市出發

五月十八日 揚子江渡河武昌地区に入る、長

沙攻撃

八月一日 衡陽攻撃準備

八月八日 衡陽攻撃終る

八月十四日 全県作戦

昭和十九年十一月十日 桂林作戦

十一月十日 柳洲作戦、懷遠付近の警備

昭和二十年 湘桂反転作戦

昭和二十年八月十五日 貴陽にて終戦

終戦時は歩兵第六十五連隊に配属中でした。第

十三師団長、陸軍中将吉田峯太郎、歩兵第一〇四

連隊(仙台)不明。第六十五連隊(会津若松)陸

軍大佐服部卓四郎、第一一六連隊(新発田)不明、

工兵第十三連隊(仙台)陸軍中佐石川省三です。

終戦までの行動は在支米空軍のため昼間は休む、夜間行動のみであったが、上官から「閻錫山と停戦協定を結んだので夜行軍しなくてもよくなった。敵の飛行機が来なくなったので」と達しがありました。そのうち「衡陽で体裁の良い無条件降伏になった」「小銃の菊の御紋章を消せ」と命令が下りました。

しばらくして「第六十五連隊の連隊旗を奉焼するから集まれ」と達しがありました。終戦時の第六十五連隊長は参謀本部の作戦課長だった服部卓四郎大佐が赴任していました。温和な人で、行軍で小休止している私達兵隊のそばに馬に乗ってきて「兵隊、出発ダヨ」と気軽に声をかけてくれました。終戦後、マッカーサー司令部からの連絡があり、私達兵隊より一足早く東京へ帰られたそうです。

共産軍との停戦協定が昭和二十一年一月二十五日に結ばれ、今まで通りの生活が続けられ、大隊本部に糧秣受領に行きました。そこでドラム缶い

っぱいの米が支給されましたが腹いっぱいとはゆかず、兵隊は帰国までは現地の農家の手伝いに行つて昼飯にありついていました。私も農家の手伝いに行き綿の木の綿抜きをして銀飯に舌鼓みをうちました。また馬を使って耕したりしました。武装解除は九江付近で受けました。

帰国命令は昭和二十一年五月十日に出ました。乗船のため揚子江の近くに行き、小舟に乗って大舟に乗り換え、南京まで行き、南京から列車で上海へ、私物検査を受けて乗船、懐かしの博多に上陸しました。

昭和二十一年六月十日、我が家に四十三カ月振り帰りましたら父は既に二十年十月に脳溢血で亡くなっていましたのが残念でなりません。

帰国後は亡き父が大量に用意して買っていた石材が幸いして家業を継ぐことができました。親子を思う心に触れて有り難く仏前に毎日お参りしております。私も高小卒業後、石工の手伝いをしていたので父の跡を継ぐことができ、息子と二人

の職人を使い石工の技能士として全国名工の集りの一員として活動しております。石材業界も中国から安い製品が輸入されるようになり、厳しい状況ですが頑張っています。

終戦から帰国までの間に中国とくに閩錫山系の軍隊から残留をすすめられた向きもあったようですが、これに応じた兵隊は私の知る限りありませんでした。山西省にいた第一軍の関係ではあったようですね。蒋介石が終戦に際して、日本軍の将兵に対して早期帰国を優先してくれた温情は、忘れてはならないと思います。

「報怒以德」の告示により民衆の日本兵に対する態度はやさしく、私の接した中国人は「シーズン今度、中国に来る時は兵隊ではなく商人で来なさい。私が面倒見てやるから」と言ってくれました。

中国人の偉大さを痛感しました。

大東亜戦争従軍衛生兵の思い出

福岡県 日巻 久次

私は父・日巻猪之蔵、母・松枝の四男三女の兄弟の一員として、大正四（一九一五）年九月十五日、福岡県三池郡飯江村で生まれました。祖父母、父母、子供七人の十一人家族です。田一町五反、畑二反（甘藷、粟、大豆）で、山間の部落では規模の大きな農家でした。祖父が健在でしたが、父は胃の病気で一時期大牟田に居住しましたので、私は小学校は大牟田第一小学校に入学し、三年生の時に帰って故郷の飯江尋常高等小学校に転入、昭和四年、高等科を卒業して家業の農業に従事しました。

当時の農家では現在のように農機類はなく、農作業はすべて人力と牛馬の力だけでした。当時の農家ではどこでも当たり前のことでしたが、子供も小学校五、六年生にもなれば、馬の飼葉の草刈